

どろ遊びと粘土遊びの全国アンケート調査に関する考察

——土粘土活動の可能性を探る——

武 小 燕

はじめに

フランスの教育者モーリス・ドベス（1982）は『教育の段階』の中で「山羊足っ子」というユニークな子ども像を描いている。すなわち、自己主張、混同心性的思考、遊びという特質を持つ子どもの人格がギリシャ神話の中で登場する牧神を連想させ、「ひづめの足は持っていないでも、山羊の足から、その生きることへのひたぶるさ、本能、無邪気な大胆さ、そしてまだほんの身近なものである土との親密なつながりを受けついでいる」¹とドベスは指摘した。子どもは自然を愛するだけでなく、その中に生き、その中で成長するものである。子どもと自然との親密さは、幼児教育で長らく認識され、様々な実践活動を通して確認されてきた。そもそも、ルソーの著書やフレーベルの実践からみられるように、幼児教育の理念や歴史は子どもを自然に帰すことからスタートしたものであった。

しかし、近代社会の発展につれ、かつて身近な自然が便利性及び効率性への人間の追求により人々の生活から遠ざけられ、今都市部には土をあまり目にする機会のない子も少なくない。実際に、筆者は 10 年前に中国から日本に来たばかりの頃、コンクリートに覆われてほとんど土の見えない都市環境に違和感を覚え、落ち着かない気持ちが長い間続いたことを記憶している。人間の自然疎外が人間自身の疎外化をもたらすことが近代社会の古典的な課題として以前から認識されていながらも、自然環境と生活環境の分断が進み、人間の自己疎外が深刻化していることが現状である。そこで幼児期の環境が特に懸念される。何よりも幼児期における自己形成が人生の基盤となり、この時期の原体験が後の思想形成に大きな影響を与えるからである。しかし、自然環境の大切さを十分に認識している保育所や幼稚園でも、近代社会のひずみを避けることができず、自然とかけ離れた環境の中で活動を展開せざるを得ないところが特に都市部を中心に全国に多く存在している。また、子どもの受験勉強に熱心な親たちのことも子どもを自然からいつそう離れさせている。このような環境が改善されるように、自然体験をしながら、子どもの発達を幅広くサポートできる保育素材の開発が重要となる。本共同研究では特に原体験の土活動に着目し、どろ遊びができると同時に、豊かな感触と変化によって子どもに様々な刺激を与える「土粘土」がこ

うした課題に応えることのできる素材としての可能性を検討していく。

I 先行研究の到達点と課題

管見の限りでは、土粘土を保育素材として日本の幼児教育・保育関係者に注目かつ実践されたのは1980年代以降である。前川吉彦（1992）は1980年代半ば横浜市の幼稚園で土粘土活動を実践し、活動が子どもの知能や表現力に対する働きを確認した。佐藤智朗（1988）は山口市の保育園で1986年から1987年にかけて土粘土を使用して泥んこ遊びから野焼きまでの実践を行った。その後も、佐藤は土粘土の実践活動を継続的に取り組み、素材の特性、子どもの主体性の形成や言葉の獲得に対する働きなどを考察した。近年の実践としては、山成昭世と岡田幸子（2006）が京都の幼稚園、新垣理佳（2008）が千葉県市川市の幼稚園で行った取組と課題などが報告されている。

これらの研究では、共に土粘土が持つ様々な表情に注目し、その変化の豊かさと遊ぶ幅の広さが良質な保育素材としての魅力を認めている。例えば、佐藤（1990）は土粘土が「硬くなったり柔らかくなったり、へこんだり伸びたりする。また、立体表現も、平面表現もでき、作ったもので遊ぶこともできる。さらに、焼くことにより、土と火から新しいものが生まれ、半永久的に保存ができるようになる」²と語っている。山成・岡田（2006）も土粘土では「親水感・親和感・体温感・融合感・再生感など他素材では感じられない感覚を体験」³できるとの見解を示した。また、土粘土は自然保育と自由保育を行うには適しており、土粘土活動は子どもの集中力や持続力の改善、主体性の形成、情緒的安定の向上などに有効だという認識がほぼ共通している。しかしながら、その実施施設がまだ少なく、活動経験の蓄積がまだ不十分だとの課題がある。それは準備や片づけが手間がかかるといった土粘土活動の難点にもよるが、何よりも土粘土の重要性の認識の普及が不十分だと佐藤は指摘した。

このように、土粘土活動は散見でき、その素材の有義性も確認されていながらも、保育現場であまり展開されていない現状が先行研究の中で浮き彫りにされた。なお、個々の実践活動に関する記述と反省が中心となった先行研究では、土粘土活動の全国での展開状況や具体的な課題についてまだ明らかにされていない。そもそも土粘土活動に関する先行研究自体がまだ少ないものである。そこで、本調査では土粘土活動と共通性が多い上に、多くの現場で取り入れられているどろ遊びと粘土遊びの実態調査により、土粘土活動の実施状況を明らかにすると同時に、土粘土活動が広がる可能性と存在する課題を分析していきたい。

II 調査の概要：調査手法と調査内容

全国の幼児教育・保育の現場におけるどろ遊びと粘土遊びの現状を把握するために、アンケート調査による量的調査を実施した。その調査対象の標本抽出は二段階を分けて行った。第一段階では、インターネットの検索機能で「どろ遊び」や「粘土遊び」のキーワードをもって無作為抽出でサンプルを選出した。第二段階では、一次抽出のデータから施設の運営状態、種類及び所在

地のバランスを考慮して系統抽出法で二次抽出を行った。具体的に、地域の人口数に比例しながら第一次標本から都道府県ごとに、私立や公立または保育所や幼稚園の性質を考慮して標本を抽出した。ただし、東日本大震災の影響で庭園活動の困難な一部の地域のサンプルを除外したほか、地元に着し、地域に貢献するという本研究センターの趣旨により、センター所在地の中部地域のサンプルを多く取り入れた。最終的に、保育所 253、幼稚園 187、児童発達支援事業 86、計 526 部の標本を抽出した。調査は、倫理的な配慮により、これらの標本となった施設に郵便による無記名式調査用紙の配布と回収を行う方法で実施した。

調査紙の内容は主に 3 つの部分から設定した。第一部分は、施設の性質や概要に関するものであり、施設の運営形態、種類、所在地、設立時期、教育方針と目標、児童人数、保育者人数、取り入れられている活動、粘土遊びとどろ遊びの実施の有無、計 9 問である。第二部分と第三部分は第 10 問と第 11 問で、それぞれ粘土遊びとどろ遊びの取組に関する設問である。設問の内容は具体的に活動の形態、予算、取り入れられた時期、使用されている素材、活動の頻度、活動を取り入れた理由、研修などである。そして、最後に第 11 問の「土の粉からどろ遊びへ、さらに粘土遊びへ展開していく活動」の有無と第 12 問の自由記述欄である。

Ⅲ 結果と考察

(1) 全国調査の結果に関する分析

今回の調査では 38.8%の回収率、計 204 部のアンケートが回収できた。回収標本の統計結果は詳しく巻末資料を参照されたい。ここでは主に調査紙の第二部分と第三部分、つまり粘土遊びとどろ遊びの実施状況を中心に分析していく。

まず、今回の調査結果からは、ほとんどの施設でどろ遊びと粘土遊びを展開していることが確認できた。どろ遊びの実施施設は全体の 89% (181)、粘土遊びの実施施設は全体の 99% (201) にも達した。活動の取り入れた時期については、いずれも 20 年以上前が最も多く、粘土遊びの場合は 148 施設、どろ遊びは 113 施設に上る。どろ遊びと粘土遊びは日本の幼児教育・保育で長らく親しまれている活動であることが示された。また、両活動とりわけどろ遊びの実施施設は、施設の種類と規模と関連し、児童発達支援事業及び子ども数の少ない施設での展開が少ないことがうかがえる。

次に、取り入れた理由や展開する際に重視する理由としては、どろ遊びでは「家庭でできない遊びの提供」(143)、「季節感の体験」(121)、粘土遊びでは「室内活動としての展開」(144)と答えた施設が最も多い。施設の活動は環境によって制限されると同時に、環境の不足を補うという積極的な役割を果たしていることが読み取れる。それらに次ぐ選択肢について、どろ遊びは「個性の発達」(56)、粘土遊びは「個性や身体性の発達」(85)となり、これらの活動は子どもの発達に積極的な働きを果たすことが期待されていることが分かる。また、どろ遊びが子どもの発達に有効だと思われる項目については、回答数の多い順で創造力(162)、集中力(125)、協調力(92)、身体力(83)、言語力(31)、その他(25)となり、精神面の期待が特に高い一方、活動は多方面

にわたって子どもの発達に良い刺激を与えると認識されている様子がうかがえる。

どろ遊びと粘土遊びに関する保育者の研修への取組については、それぞれ 14 施設と 12 施設しか行われておらず、ほとんどの施設で実施されていない。これらの活動の専門性が認められているとは言い難い結果である。自由記述欄における次の記述がこの現状の一端を示すことができよう。「特別なものとして、どろ遊びや粘土遊びを取り組んでおらず、特にどろ遊びは日々の中で毎日のようにやっている」、「どろ遊びは教材としてとらえず、子どもにとって大切なもの、空気や食物のように子どもにとってなくてはならないものととらえています」など。つまり、どろや粘土が専門性の高い保育素材というよりは、子どもにとって日常的な存在だと認識されており、そのため、研修の必要性が感じられていないと言える。一方、「この調査を受けて、粘土、どろ遊びの研修を行いたいと思いました」との記述もある。どろ遊びや粘土遊びが自明視されてきた活動からより専門性の高い活動へと転換するには、保育者がその必要性を認識することが重要だと言える。また、どろ遊びの場合は保護者に対して説明を行うかについて、55 の施設は何らかの形による説明も「行わない」と回答している。その割合はどろ遊び実施施設の 30%を占めている。つまり、30%の施設が子育てのパートナーである保護者に対しても、説明の必要性を感じていない、または感じていながらも実施していない現状である。この結果からも、粘土遊びやどろ遊びの専門性に関する認識が薄いという現状が読み取れよう。

どろ遊びや粘土遊びを取り入れる年齢と頻度については、いずれも年齢が上がるにつれて回数が増え、特に 3 歳児を境にして大きく異なる。どろ遊びについては、0 歳、1 歳、2 歳児の中で活動を取り入れる施設数は、それぞれ 13、41、84 に止まるが、3～5 歳児の場合はいずれも 160 前後の施設数となっている。どろ遊びの取り入れる頻度は主に「週に 1～3 回」または「年に数回」となり、日常的に取り組む施設と季節の活動やイベントとして取り入れる施設に大きく分かれている様子がうかがえる。粘土遊びについて、0～2 歳児の場合は「年に数回」行うのが最も多いが、3 歳児以上の場合は個人遊びか集団遊びかによって異なる。3 歳児以上の個人遊びでは「週に 1～3 回」で行う施設が最も多いが、集団遊びとしての粘土遊びでは年齢を問わずに「年に数回」程度で行う施設が多い。つまり、どろ遊びと粘土遊びはいずれも日常活動と非日常的な行事活動という 2 つの活動形態を持っている。どろ遊びは主に季節性から制限を受けるのに対し、粘土遊びは個人遊びの場合に日常活動、集団遊びの場合に行事活動として位置づけられる傾向がある。

さらに、粘土には幅広いものがあり、その種類によって遊びの形態が大きく異なるため、上記の頻度のほか、粘土遊びの形態・取り入れた時期・素材も「個人で遊び」と「集団で遊び」に分けて設問した。調査結果では、個人遊びとして取り組む施設が全体の 88% (180) を占めるのに対し、集団遊びとして展開する施設が全体の 52% (106) に止まっている。つまり、個人遊びとしての粘土活動が幼児教育・保育の現場でより定着していると言える。また、取り入れた時期について、個人遊びを展開する施設の中で 20 年以上展開されたのは 82% (148) に対し、集団遊びのそれは 60% (64) 程度である。二つの活動が日本で展開された歴史の長さに差がみられ、この点も現場での定着度に影響する一要因になろうと推測された。使用される素材は油粘土・土粘土・

紙粘土・小麦粘土・その他に分けて見ると、図1で示された通り、個人遊びにおいても集団遊びにおいても0～2歳児の中で小麦粘土が、3～5歳児の中で油粘土が最もよく使われていることが分かる。特に3～5歳児の個人遊びの中で油粘土は圧倒的な優勢を持つ。それに対し、3～5歳児の集団遊びでは相対的に各素材が一定の割合を占めている。土粘土はいずれの年齢層と活動形態においても、ここで取り上げられた四つの素材の中で使用される施設が最も少ない。この調査結果は先行研究で指摘された土粘土活動の展開がまだ少ないことと一致している。

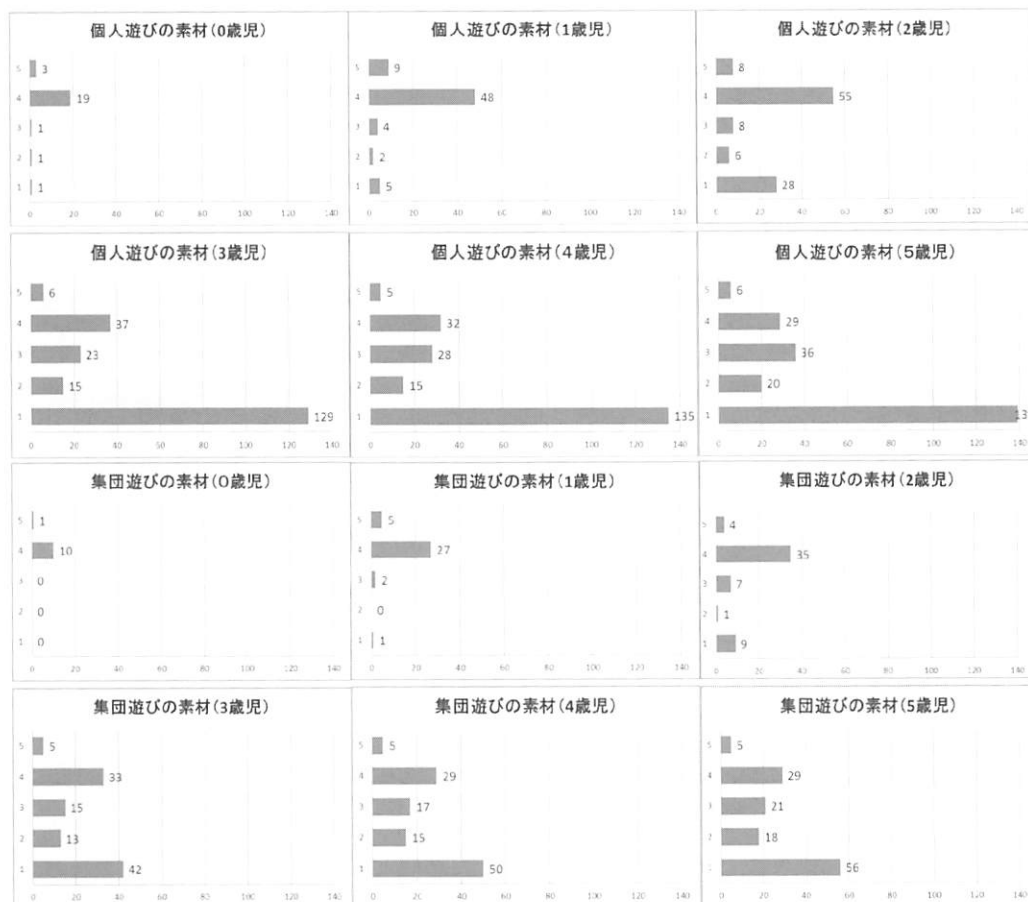


図1：各年齢に取り入れる粘土遊びの素材について

注：縦軸は素材（1 油粘土、2 土粘土、3 紙粘土、4 小麦粘土、5 その他）、横軸は施設数を表す。

どろの素材については、「庭の砂や土」（165）が圧倒的に多く、全体の81%、どろ遊び実施施設の92%を占める。購入した土の利用施設は25しかない。購入した土には、山土や畑用の土といったものもあれば、越前荒土（福井県）や島尻土（沖縄県）といった特別な土もある。また、自由記述欄で次のような記述がみられる。「園庭9000平方の内に、粘土質の土が出る場所があり、子ども達は、粘土場から自由に取り出して遊んでいる。自由な創造性を育てる遊びとして重要な

意味をもっている。」つまり、施設の所在地によってどろ遊びの素材に特徴がみられる。購入の場合は、量は数十キロから数十トンまで、予算は数千円から数十万円まで幅広いが、たいいてい数万円の予算内で単価に応じて素材を購入する様子である。

他方、粘土の予算については、「予算がないが、必要に応じて購入する」施設は全体の 51% (105) を占め、「一定の予算がある」施設は 7% しかない。予算のある場合に、数千円前後の予算で単価によって数キロから数十キロまでの粘土を購入する施設が多く、予算の金額も量もどろ遊びより大きく下回る。また、32% (65) の施設が「予算なしまたは保護者に購入してもらう」こととなっている。ほとんど庭の砂や土を使用するどろ遊びに比べ、粘土遊びのほうは費用が必要となる場合が多いことがうかがえる。

(2) 土粘土活動の実施施設に関する分析

今回の調査では、土粘土活動の取組はどのような実態が示されているのだろうか。図 1 の中で土粘土を利用している施設を土粘土活動の実施施設（以下、土粘土活動施設）として抽出して分析する。

調査結果では、土粘土活動施設は計 32、そのうち個人遊びのみは 14 施設、集団遊びのみは 11 施設、両方とも取り組んでいるのは 7 施設である。公設公営 (15) と私立 (18) は約半々で、全国調査結果とほぼ比例しており、運営形態上の偏りは特にみられない (表 1)。施設の種類の主には保育所 (14) と幼稚園 (17) に集中している (表 2)。全国調査結果に対し、幼稚園の実施がやや多いことと児童発達支援事業での展開が少ないことが特徴である。

表 1 運営形態に関する土粘土活動施設と全国調査施設の比較

	公設公営	公設民営	私立	無記入
土粘土活動施設	14(44%)	0	18(56%)	0
全国調査施設	93(46%)	14(7%)	96(47%)	1(0%)

表 2 種類に関する土粘土活動施設と全国調査施設の比較

	保育所	幼稚園	児童発達支援事業	認定こども園	その他	無記入
土粘土活動施設	14(44%)	17(53%)	1(3%)	0	0	0
全国調査施設	106(52%)	56(27%)	33(16%)	1(0%)	6(3%)	2(1%)

土粘土活動施設の所在地は新潟県 (新発田市)、広島県 (福山市)、徳島県 (鳴門市)、愛知県 (長久手市、瀬戸市、名古屋市、春日井市、尾張旭市)、岐阜県 (多治見市、中津川市)、東京都 (大田区)、沖縄県 (那覇市)、岡山県 (岡山市)、香川県 (さぬき市)、富山県 (砺波市)、山口県 (周南市)、福井県 (福井市)、千葉県 (我孫子市)、島根県 (安来市)、京都府 (京都市) にわたる。標本の多い中部地域には愛知県 13 施設、岐阜県 6 施設あるが、他の各地では 1 施設ずつである。

土粘土活動の展開施設は主に陶芸用の土のある場所または陶芸文化のある場所とその周辺に集中していることがうかがえる。土粘土の素材を入手しやすいことやその特徴に詳しい陶芸関係者の存在により、土粘土活動が展開しやすくなることが考えられる。

土粘土活動を取り入れる年齢について、図 1 で示したように、個人遊びの場合に 0 歳、1 歳、2 歳、3 歳、4 歳、5 歳、6 歳児の活動に取り入れるのがそれぞれ 1、2、6、15、15、20、集団遊びの場合に 0、0、1、13、15、18 の施設である。3 歳児以上の年齢層で特に取り組まれていることがうかがえる。土粘土活動施設の状況の一つずつ確認すると、3 歳児、4 歳児、5 歳児の中に共に取り入れている形態が個人遊びにおいても集団遊びにおいても最多で、計 21 の施設である。また、個人遊びでは 6 施設が 2 歳以下の子どもへの取組を行っているが、集団遊びでは 1 施設のみである。

また、子どもの発達への働きに関する認識については、土粘土活動施設と全国調査の対象施設の間に一定の差が示されている（表 3）。粘土遊びやどろ遊びを取り入れた理由について、全国調査に比べ、「室内活動としての展開」と「季節感の体験」を選択した土粘土活動施設の割合が少なく、「異年齢交流の促進」や「個性の発達」の選択率が高い。環境を補うという消極的な動機に止まらず、子どもの発達にいかなる働きがあるかという積極的な動機がより強いことが示された。また、どろ遊びが子どもの発達に有効だと思われる項目について、言語力、身体力、協調力、集中力、創造力のいずれも、土粘土活動施設の選択率がより高い。つまり、土粘土活動施設は全国調査の中で特に子どもの発達という視点を重視していると言える。

なお、粘土遊びとどろ遊びに関する研修の取組について、土粘土活動施設の実施率も高くないが、いずれも全国調査結果を上回っている（表 4）。保護者に対するどろ遊びの説明を行わないと答えた施設の割合でも、土粘土活動施設が全国調査結果より 10%以上低い（表 4）。つまり、全国調査施設の中で土粘土活動施設は研修意識や専門性意識がより高いと言えよう。

表 3 活動展開の理由等に関する土粘土活動施設と全国調査施設の比較

粘土遊びを展開する際に重視する理由				
	親子活動の 促進	異年齢交流 の促進	室内活動とし ての展開	個性や身体 性の発達
土粘土活動施設	0	4(13%)	20(63%)	18(56%)
全国調査施設	4(2%)	7(3%)	144(71%)	85(42%)
どろ遊びを取り入れた理由				
	家庭でできない 遊びの提供	異年齢交流 の促進	季節感 の体験	個性の発達
土粘土活動施設	25(78%)	7(22%)	13(41%)	11(34%)
全国調査施設	143(70%)	27(13%)	121(59%)	56(27%)

どろ遊びが発達に有効と思われる項目（複数回答）						
	言語力	身体力	協調力	集中力	創造力	その他
土粘土活動施設	7(22%)	17(53%)	23(72%)	26(81%)	29(91%)	2(6%)
全国調査施設	31(15%)	83(41%)	92(45%)	125(61%)	162(79%)	25(12%)

表 4 研修の取組と保護者への説明に関する土粘土活動施設と全国調査施設の比較

	保育者に対して粘土遊びの研修に取り組んでいるか		保育者に対してどろ遊びの研修に取り組んでいるか	
	している	していない	している	していない
土粘土活動施設	5(16%)	27(84%)	4(13%)	24(75%)
全国調査施設	12(6%)	180(88%)	14(7%)	163(80%)
保護者に対するどろ遊びの説明を行うか				
	個別説明	文書による 一斉説明	説明会による 一斉説明	行わない
土粘土活動施設	6(19%)	17(53%)	4(13%)	5(16%)
全国調査施設	40(20%)	81(40%)	24(12%)	55(27%)

注：合計 100%とならない場合には、①活動を実施していない施設、②回答を記入していない施設があるためである。

Ⅳ まとめ：どろ遊びと粘土遊びの現状からみられる土粘土活動の可能性

以上の結果と考察をまとめると、今回の調査により、どろ・粘土遊びは保育所と幼稚園を中心に日本の幼児教育・保育の現場で長らく親しまれている活動であり、その展開が特に家庭環境や自然環境といった外的要素と子どもの発達といった内的要素の二つの視点から取り込まれていることが分かった。しかしながら、その研修の必要性に関する認識が薄く、活動の専門性が特に意識されていない様子がうかがえる。活動は 3～5 歳児を中心に展開する施設が大半であり、その位置づけが日常活動と非日常的な行事活動の二つに分かれている。さらに、粘土遊びの中で個人遊びは日常活動、集団遊びは行事活動として位置づけられる傾向がある。使用される素材は、どろ遊びのほとんどが庭の砂や土であるが、購入の場合に畑や山の上または地域の特別な土になり、数万円の予算となることが多い。粘土遊びでは 0～2 歳児の中で小麦粘土、3～4 歳児の中で油粘土がもっともよく使用されている。また、予算がなくても必要な場合に施設または保護者が購入することが多い。

全国調査対象の中で土粘土活動施設は 32、全体の 16%程度である。公設公営と私立がほぼ半々で、運営形態上の特徴が特にみられなかった。しかし、種類上では保育園と幼稚園に集中し、児童発達事業での展開が少ないという特徴がみられた。地域上では、これらの施設が主に陶芸用の土のあるところまたは歴史上に陶芸文化の存在したところに集中している。また、土粘土活動施

設は子どもの発達に対してより高い関心を持ち、研修意識や専門性意識も相対的に高いという結果が示されている。

前述のように、本共同研究では自然体験ができながら、子どもの発達を幅広くサポートできる保育素材として土粘土に着目した。アンケート調査の結果分析を通して、土粘土がこうした課題に応える可能性が大いに潜んでいることが分かった。その活動形態と最も関連性のあるどろ遊びと粘土遊びの実施施設の中で、土粘土活動施設がこうした自然活動が子どもの発達に対する積極的な影響をより認識しており、専門性意識もより高いものであった。実際は、別に行われた本共同研究の実践活動においても、協力施設の保育者たちは高い専門意識を持ち、土粘土活動が子どもの発達にどんな働きを果たすかを注意深く観察している様子が見られた。

また、今回の調査では児童発達支援事業での展開が僅か1施設に止まっている結果であったが、先行研究と今回の実践活動で指摘されたように、土粘土活動は健常児だけでなく、障害児に対してもその発達を促す上に積極的な働きをするものである。障害児教育の先駆であるモンテッソーリに学び、土粘土の豊かな触覚性を感覚教育に取り入れる余地が大いにあると考えられる。そして、活動を取り入れる際に現実的な課題である費用については、今回の調査結果からみれば、粘土の種類と量にもよるが、許容できる範囲内だと言えよう。ただし、今回の調査では土粘土活動施設が主に陶芸文化のあるところに集中している結果が示され、陶芸関係者の影響を垣間見ることができる。実際に本共同研究においても陶芸専門家の存在が大きい。こうした地域性の問題をいかに克服するかが今後の課題となる。

【注】

- (1) モーリス・ドベス(1982),p.68.
- (2) 佐藤(1990),p.186.
- (3) 山成・岡田(2006),p.68.

【参考文献】

- 新垣理佳(2008)「自由保育と課業的な行いのかかわりについて：土粘土での制作活動を例にして」『授業実践開発研究』(1),pp.51-58.
- 福田理恵・宮脇佳子・佐藤明日花他(2011)「土粘土遊びにみる表現活動の発達」『彰栄表現研究所研究紀要』(4),pp.20-30.
- クラウス・ルーメル編(1999)『モンテッソーリ教育の道』学苑社.
- 前川吉彦(1992)「保育素材の粘土について」『教育方法学研究』(17)日本教育方法学会紀要,pp.137-144.
- モーリス・ドベス(1982)『教育の段階』堀尾輝久・斎藤佐和訳,岩波書店.
- 西卓男(2006)「テラコッタ技法をとおして子どもの造形教育の指導と環境作りー土粘土の制作から焼き上げまでー」『神戸親和女子大学児童教育学研究』(25),pp.69-77.
- 佐藤智朗(1988)「保育素材としての土粘土についてー野焼きまでの実践を通しての考察ー」『日本保育学会第41回大会研究論文集』,pp.32-33.
- 佐藤智朗(1990)「保育素材としての土粘土について(2)ー保育現場でできるテラコッター」『日本保育学会第43回大会研究論文集』,pp.186-187.
- 佐藤智朗(1997)「保育素材としての土粘土について(5)ー素材の特性を生かすー」『日本保育学会第50回大会研究論文集』,pp.476-477.

武 小燕

山成昭世・岡田幸子(2006)『『土粘土の造形遊び』短期大学・幼稚園の共同実践を通して』『聖母女学院短期大学研究紀要』(35),pp.48・71.

(名古屋経営短期大学子ども学科 講師)